ワールドカップが開催さる

ヤクルトシンクロナイズドスイミング、デサント水泳

須川育春

世界新記録一
日本新記録二十一

これが今回のＦＩＮＡワールドカップ（競泳）が残していった記録である。

ワールドカップ（競泳）はオリンピック、世界選手権につぐ新しい今回が第一回という国際競技会であり、今年から隔年開催される予定である。

大会の特色としては、(1)前年の世界選手権大会の上位入賞チームと日本の計八チームが参加（アメリカ、ソ連、スウェーデン、カナダ、オーストラリア、アメリカ大陸、ヨーロッパ選抜、日本）

(2)競技は各種目とも一チーム一名（リレーは一組）の選手出場による決勝一発レース。

(3)チーム別対抗戦で最高得点チームにはＦＩＮＡワールドカップトロフィーが与えられる。

となっている。

日本での開催ということで

(1)ホスト国として全面的に参加を許された好機を活かし、わが国の一線級選手が世界の強豪に伍して直接勝敗を争う体験をもつこと。

(2)多くのコーチや競技者が、世界最高水準の実態を観測し認識すること

(3)長く続いた日本水泳界の不振には七月からの水不足による給水制限の問題が持ち上がり、第三次制限の際は大会も開催できないのではないかと心配された。しかしその後水事情もよくなり、いらぬ心配、取越し苦労に終り関係者一同胸をなでおろす場面もあった。

もう一つの問題としては水温の一定化ということである。

本来ワールドカップは競技水泳の四部門（競泳、シンクロ、水球飛込）をそれぞれ独立した競技会として、異った時期に、異った都市で分散して行なう建前を採るのであるが、本年に限り日本で競泳シンクロの二種を同一プールで行なうことになった。

競泳、シンクロには共に、適正な水温というものがある。日程に一日の余裕もないため、この水温の差一・五度～二度を水の入れ換えで行なった。大会終了後、徹夜に近い状態で機械を作動し、満足できる水温にもっていった。

このように施設管理者として影武者のごとき努力によって世界新記録、日本新記録が生まれたことに非常に満足をおぼえるものである。

（第二業務部業務課）

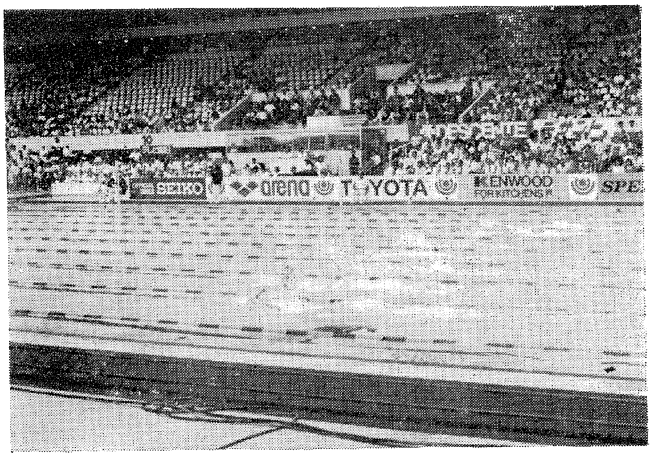
よって水泳離れしている多くのファンや、未知のスポーツファンに水泳への興味と理解をもたせること（月刊水泳）

以上のように地元開催の利点を考察している。

この利点を生かしてか、二十九種目で日本新記録が二十一も生まれ、この大会が日本水泳のはずみになることを願って地元開催した意義は、十分にあった事を物語っている。

又日本で世界新というアナウンスを聞くのは実に七年ぶりの出来事であることを思うと、施設管理者として世界新が出るための一助となれた事は非常にうれしいことである。

しかし今大会の打合せの段階で



写真は同大会（競泳）９月３日